

（編年體）が作成され、日曆をもとに實錄（編年體）が作成され、實錄をもとに國史（紀傳體）が作成される。今日我々が用いる『宋史』は、元代に國史をもとに編纂されたものである。なお、宰相・執政が輪番で皇帝との政治會話を記した時政記が敕撰史料として編纂されるのは、唐代半ば頃から宋代を通じてであり、この時代は皇帝―官僚間を直接結びつける「對」と呼ばれる政治システムが発達した時代でもある。そして、宋代では、宰相・執政は時政記を作成するために、個々人が日記を記していたといわれており、『司馬光日記』、『王安石日録』などの日記が史料編纂所に集められ、實錄・國史の編纂材料に用いられた。この二つの日記が、『神宗實錄』・『神宗正史』の編纂において、新法黨・舊法黨それぞれの思惑で用いられたことは餘りにも有名である。これら時政記、日記は皇帝との會話を記することを主たる目的としており、『續資治通鑑長編』中のとりわけ神宗・哲宗期に残されている皇帝―官僚間の豊富な政治會話の記録は、時政記・日記史料を反映するものである。

今回の報告では、断片的に残されている日記・時政記を手掛かりに、宋代政治史料の利用方法及びその新たな史料的可能性を提示したいと思う。

楚簡における卜筮祭禱簡の構造と復元

工 藤 元 男

近年重要な楚簡が相出土し、それによって楚系文字の古文字研究

や楚簡に含まれた先秦典籍の研究も進展し、楚簡研究は先秦文化史における一つの固有の研究分野を構成している如くである。これまで私は睡虎地秦墓竹簡を手がかりに、秦の南郡をフィールドに設定し、占領者秦と舊楚の對峙・交流・融合の諸相を秦楚相互の視點から分析する方法を提起してきた。そして楚簡の増加により、さらに秦の占領直前における楚の文化状況の一端が知られるようになった意義は大きい。そこで今回は、とくに楚の宗教面における日常生活の構造を説明するため、包山楚簡を基準に、さらに望山楚簡などいくつかの断片的な卜筮祭禱簡をとりあげ、それを全體の構造へ位置づけを試み、復元されたその資料からどのような史料的可能性が出てくるかを探ってみた。

錢大昕と『（乾隆）鄞縣志』

稻 葉 一 郎

錢大昕は、清代の歴史考證學の第一人者とされ、彼の『二十二史考異』『十駕齋養新錄』などでの精緻な考證の成果は今日でも高い評價を維持している。しかしながら歴史家としての力量については必ずしも明確な評價は出ていないのではないだろうか。彼が著わした『元史稿』は今日、行方不明になっているので、具體的にそれについて検討することができない。多數の執筆者の一人として参加した『續通志』などを除けば、上記の課題を追究する上で、残された可能な對象は彼の編修した地方志であらう。

一般に中國の地方志は地誌的地方志と歴史敘述的地方志とに大別され、その内容・編修方法に大きな差異があるが、錢大昕は地方志を歴史敘述の一種としてとらえており、生涯に三度、その編修にたずさわっている。すなわち乾隆二十一年、二十九歳のとき紀昀と共に『熱河志』八十卷の、同五十二年、六十歳のときには單獨で

『鄞縣志』三十卷の、嘉慶六年、七十四歳のときは弟錢大昭と共に『長興縣志』二十八卷の編修に従事した。ここでは『鄞縣志』を中心に彼の歴史敘述編修の立場と方法論などについて報告することにした。